

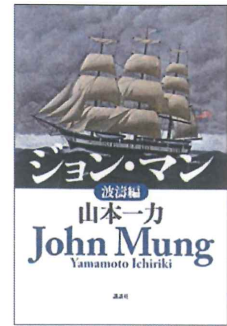
とらっくあずまくん

2020.10月発行 vol.5
有限会社トラックアズマ



本社の上垣聡です。

まだまだ残暑が厳しいですが、皆様いかがお過ごしでしょうか？ 今回私からは読書の季節に伴い、今私が読んでいる本をご紹介します。その本はというと、山本一力著“ジョン・マン”です。以前から大好きな作家さんで、読んでみたい候補にはあったのですが、なにせ長編すぎるため、なかなか手にとる勇気が持てなかった作品でした。読んでみようと思ったのは、当社の看板でもある吸引車のメーカー兼松エンジニアリング様の本社、高知を訪ねたことがきっかけでした。高知県はたくさんの著名人を輩出した県であり、各所に賢人由来の名所があるのですが、「中濱万次郎」は、はて何をした人なのか？しっかりと説明することができない！！漂流してアメリカに渡った事くらいしか知らない！！（汗）折角なのでこれを機会に読んでみよう！とスイッチが入りました。



土佐中ノ濱で生まれた万次郎は、1841年1月 漁船に炊事係として乗り込み、自分と仲間4人と共に足摺岬からはるか遠くの無人島の“鳥島”に漂着します。

この時わずか14才の万次郎はこの無人島で143日間を生き延びたそうです。万次郎たちはアメリカから来た捕鯨船“ジョン・ハウランド号”に助けられるが、鎖国している日本に帰還する術がなく、仕方なく捕鯨船の船員としてアメリカに向かうことになりました。

帰還途中に立ち寄ったハワイで仲間4人は船を降りますが、日本に帰還する為の船代を稼ぐため、ただ一人捕鯨船に乗り続けることを決意することから、万次郎の数奇な物語が始まります。

ジョン・ハウランド号の船長ウィリアム・ホイットフィールドのはからいにより、世界を一周しアメリカに渡る万次郎ですが、その間、日本にはない文化や人種差別などに遭いながらも、ひたむきに努力する姿は、読んでいて暗さや、辛さはあまり感じられず、何事においても前向きな姿勢こそが問題解決の秘訣なのでは？と考えさせられます。

現在出版されている“ジョン・マン”は1巻 ^{はとう}波濤編、2巻 大洋編・・・と7巻の ^{かいこう}邂逅編まで出ていますが、まだまだ終わる気配はありません（笑）。

万次郎と同郷土佐出身である著者のライフワークとして書かれているようで、これからも長い間楽しむことが出来るかと思えます。

ちなみに同著者で直木賞を受賞した「あかね空」も江戸時代を背景に家族を描いた作品で、とても読み応えがありました。

読書の秋、皆さんも一度手に取ってみてはどうでしょうか？



高知県南部に位置する足摺岬

ちなみに…足摺岬～鳥島の距離
直線距離 大阪～仙台と同じくらいようです。
海なので漂流したでしょうから…

万次郎がアメリカで過ごした家

現在は、ホイットフィールド＝万次郎友好記念館
になっています。



※写真は、インターネットからお借りしました。

足摺岬とアメリカの家、いつかは行ってみたいです！

⇒⇒ 裏面もあります ⇒⇒

本社の岡村悦士です。

今回は休日の過ごし方について話したいと思います。

今は、子どもが小さい事、コロナの関係で行けていませんが、休日は家族で吹奏楽団の練習に参加しています。

私が演奏する楽器は、バリトンサクソスと言ってサクソスの中でも低音を担当しています。決して表立って目立つ楽器ではないですし、あまりメロティがあるわけでもないですが低音、ベースを担当することによりメロティ、他の楽器の多種多様な音を支えている縁の下の力持ち的な楽器です。

低音で他の楽器を支えることによって、音楽が完成する喜びがありとても楽しく演奏しています。

大人数で演奏するのも楽しいですが、個人的にはアンサンブルがとても好きです。

同じサクソスで4～6人で演奏します。少人数な分、自分の音もよく響くので達成感もあります。

もちろん緊張はアンサンブルの方がします。

失敗すると目立ちます（笑）。

サクソスパートで
アンサンブル中♪
みんな真剣です！



楽団全体での演奏でもアンサンブルでも言えることは、だれかと一緒に演奏する喜びがあるということです。

また世間が落ち着いてきたら、家族で練習、演奏会などやっていきたいと思っています。



所属している楽団のファミリーコンサートでの1枚です。
写真でもわかる通り(?) 和気あいあいとした楽団です。また皆様の前で演奏できますように。

読書の秋、音楽の秋、スポーツの秋、芸術の秋、食欲の秋… いろいろな秋がありますね。
皆様にとって素敵な秋となりますように…